

私には弟が一人いる。私たちは正反対の性格で、人との付き合い方も大きく違う。弟は会社員でありながら、米を作っている。そして、亡父と同じように、独居の伯母の世話に毎晩通うことまでしていた。その上、人付き合いのいい弟は、夜の高知の街の経済にも大いに貢献していた。

お互いに思いは通じているので「無理しなよ。倒れたらみんなが困るからね(笑)」と言う私に「僕の心配じゃあないの?(笑)」と返していた。

一月中旬、心配が現実となってしまった。夜中十二時「左半身に力が入らん」と弟からの電話。救急病院での診断は脳出血。「覚悟してください」との医師の言葉に震えた。四十日程の入院生活の後、弟が自力で歩き帰宅できた時には、亡父やご先祖様に感謝したことであった。

それと同時に、弟が回復できたのには、医療の力は勿論だが、周りの人たちの思いやその人たちとの関係が大きかったと思う。仕事関係、サークル仲間、友達、行きつけの店と、私の知らない方々が連日お見舞いに来て下さっていた。

「仕事への送迎をしちゃお」と

温かい思い

言ってくれるおじさん。「これは難しいね」とリハビリに付き合ってくれる若者もいた。四月になり、田を耕し田植えをしてくれたのは、父のころから親しい関係にあった近所のおじいさん達だった。言語の領域の出血はなかったので、弟も周りのみんなも何事もなかったかのように笑顔で軽口をたたきあっていた。

そんなころに読んだ娘の大学同窓会の会報に「恩送り(ペイ・フォワード)」という言葉が載っていた。

誰かからいただいた恩(厚情・親切)をその相手に返す「恩返し(ペイ・バック)」ではなく、次の誰かに恩を渡すことで「恩」は広がっていくという、アメリカでとり上げられている社会現象だそうである。

さあ、これからどう生きて行こうか。

*このシリーズはあなたとあなたの周りにいる人の間に温かなつながりが生まれることを願い、人権について考えるきっかけになることを目的としています。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎ 880・6569